

10.2 [日]	第3回 パルテノン名曲シリーズ パルテノン多摩 大ホール／15時開演 Parthenon Popular Series, No. 3 Sunday, 2nd October, 15:00 / Parthenon Tama in Tama-center
----------	--

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）
Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P.6

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ベルリオーズ 序曲〈ローマの謝肉祭〉 作品9 [約8分] P.9
BERLIOZ / “Le carnaval romain” Overture, op. 9

ビゼー 〈アルルの女〉第2組曲 [約18分] P.10
BIZET / L'arlésienne suite No. 2
I. パストラール
II. 間奏曲
III. メヌエット
IV. ファランドール

[休憩 Intermission]

ベルリオーズ 幻想交響曲 作品14 [約49分] P.11
BERLIOZ / Symphonie fantastique, op. 14
I. 夢と情熱
II. 舞踏会
III. 野の情景
IV. 断頭台への行進
V. ワルブルギスの夜の夢

[主催] 多摩市文化振興財団、読売日本交響楽団、読売新聞社
[助成] 令和2年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

10.8 [土]	第192回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 192 Saturday, 8th October, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
10.9 [日]	第192回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 192 Sunday, 9th October, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
10.10 [月・祝]	第91回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 91 Monday, 10th October, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）
Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P.6

ピアノ／マルティン・シュタットフェルト Piano MARTIN STADTFELD P.7

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ラモー 〈カストールとポリュックス〉組曲 [約17分] P.12
RAMEAU / Castor and Pollux Suite
I. 序曲
II. ガヴォット
III. タンプラン
IV. シャコンヌ

モーツァルト ピアノ協奏曲 第15番 変ロ長調 K. 450 [約25分] P.13
MOZART / Piano Concerto No. 15 in B flat major, K. 450
I. Allegro
II. Andante
III. Allegro

[休憩 Intermission]

シューベルト 交響曲 第8番 ハ長調 D 944 〈グレート〉 [約48分] P.14
SCHUBERT / Symphony No. 8 in C major, D 944 “The Great”
I. Andante – Allegro ma non troppo
II. Andante con moto
III. Scherzo : Allegro vivace
IV. Allegro vivace

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）（10/8、9）
[事業提携] 東京芸術劇場（10/8、9）
[協力] 横浜みなとみらいホール（10/10）

10.14 [金]

第597回 名曲シリーズ
サントリーホール／19時開演
Popular Series, No. 597
Friday, 14th October, 19:00 / Suntory Hall

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P. 6

メゾ・ソプラノ／カレン・カーギル Mezzo-Soprano KAREN CARGILL P. 7

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

シューベルト 劇音楽〈ロザムンデ〉序曲 [約10分] P. 15
SCHUBERT / “Rosamunde” Overture

ベルリオーズ 夏の夜 作品7 [約31分] P. 16
BERLIOZ / Les nuits d'été, op. 7

- I. ヴィラネル
- II. ばらの精
- III. 入江のほとり
- IV. 君なくて
- V. 墓地で
- VI. 未知の島

[休憩 Intermission]

シューベルト 劇音楽〈ロザムンデ〉から
“間奏曲 第3番”“バレエ音楽 第2番” [約15分] P. 15
SCHUBERT / Intermezzo No. 3 and Ballet music No. 2 from “Rosamunde”

ベートーヴェン 交響曲 第8番 ヘ長調 作品93 [約26分] P. 21
BEETHOVEN / Symphony No. 8 in F major, op. 93

- I. Allegro vivace e con brio
- II. Allegretto scherzando
- III. Tempo di menuetto
- IV. Allegro vivace

※一部曲目が当初予定より変更されました。

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
〈サントリーホール30周年記念参加公演〉



10.19 [水]

第563回 定期演奏会
サントリーホール／19時開演
Subscription Concert, No. 563
Wednesday, 19th October, 19:00 / Suntory Hall

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P. 6

ヴァイオリン／五嶋みどり Violin MIDORI P. 8

コンサートマスター／日下紗矢子、長原幸太
Concertmaster SAYAKO KUSAKA, KOTA NAGAHARA

シューベルト（ウェーバー編）6つのドイツ舞曲 D 820 [約9分] P. 22
SCHUBERT (arr. Webern) / Sechs Deutsche Tänze, D 820

コルンゴルト ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35 [約24分] P. 23
KORNGOLD / Violin Concerto in D major, op. 35

- I. Moderato nobile
- II. Romance : Andante
- III. Finale : Allegro assai vivace

[休憩 Intermission]

J.M. シュタウト ヴァイオリン協奏曲〈オスカー〉（日本初演） [約18分] P. 24
J.M. Staud / Violin Concerto “Oskar” (Japan premiere)

デュティユー 交響曲 第2番〈ル・ドゥーブル〉 [約30分] P. 26
DUTILLEUX / Symphony No. 2 “Le Double”

- I. Animato, ma misterioso
- II. Andantino sostenuto
- III. Allegro fuocosco – Calmato

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
[協力] アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）
※平成28年度（第71回）文化庁芸術祭参加公演
〈サントリーホール30周年記念参加公演〉

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。



シルヴァン・カンブルラン

(常任指揮者)
Sylvain Cambreling

マエストロの真骨頂発揮
変幻自在なタクトで魅了

幅広いレパートリーと斬新なプログラム、色彩感あふれる演奏が持ち味の読響常任指揮者が、今月は真骨頂を発揮する。18世紀のラモーからベートーヴェン、シューベルト、20世紀のデュティユーまで変幻自在、縦横無尽な棒さばきで聴衆を魅了するだろう。ピアノのシュタットフェルト、ヴァイオリンの五嶋みどりとの共演も大きな話題だ。

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでにブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、フランクフルト歌劇場の音楽総監督、バーデンバーデン&フライブルクSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者を歴任し、現在はシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督とクラゲフォーラム・ウィーン的首席客演指揮者を兼任している。また、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、ドイツ・マイントのヨハネス・ゲーテンベル



ク大学で指揮科の招^{しょうへい}聘教授も務める。客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルを始めとする欧米の一流楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。録音にも積極的で、読響とは《幻想交響曲ほか》《ペトルーシュカほか》《第九》《春の祭典／中国の不思議な役人》《スコットランドほか》をリリースしている。

- ◇10月2日 バルテノン名曲シリーズ
- ◇10月8日 土曜マチネーシリーズ
- ◇10月9日 日曜マチネーシリーズ
- ◇10月10日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
- ◇10月14日 名曲シリーズ
- ◇10月19日 定期演奏会



©Uwe Arens

ピアノ マルティン・シュタットフェルト
Piano Martin Stadtfeld

世界が注目するドイツの鬼才ピアニストが、満を持して読響に初登場。端正なモーツァルトの協奏曲で、どんな新解釈を披露してくれるだろうか。

1980年ドイツのコブレンツ生まれ。2002年にライブツィヒ・バッハ国際コンクールで1位となり、一躍有名になった。04年ソニーからバッハ〈ゴルトベルク変奏曲〉で衝撃的なCDデビューを飾り、「グレン・グールドの再来」と評される。その後はヨーロッパの一流オーケストラと共演を重ね、ザルツブルク音楽祭など世界のひのき舞台で活躍。日本にも多くのファンを持つ。

- ◇10月8日 土曜マチネーシリーズ
- ◇10月9日 日曜マチネーシリーズ
- ◇10月10日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



©K K Dundas

メゾ・ソプラノ カレン・カーギル
Mezzo-Soprano Karen Cargill

イギリス・スコットランド生まれのメゾ・ソプラノ。2002年に新人歌手の登竜門として知られる英国のキャスリーン・フェリア賞を受賞し、世界的に注目を浴びる存在となった。これまでに指揮者ではレヴァイン、ゲルギエフ、ハイティンク、ラトル、チョン・ミョンフンら、オーケストラではボストン響、シカゴ響、ベルリン・フィル、ロンドン響などと共演を重ね、メトロポリタン歌劇場、英ロイヤル・オペラ、ザルツブルク音楽祭などにも出演している。ベルリオーズ、ヴェルディ、ブルックナー、マーラーなどをレパートリーとしている。読響初登場。

- ◇10月14日 名曲シリーズ

ヴァイオリン 五嶋みどり

Violin MIDORI

世界が誇る MIDORI
読響と12年ぶり共演

11歳でメータ指揮のニューヨーク・フィルとの共演でデビュー以来、世界の著名な音楽家、オーケストラと共演を重ね、日米の教科書にも登場するなど、最もポピュラーなクラシック音楽家として親しまれている。現代音楽の初演や新進作曲家の作品発表、委嘱プロジェクトの推進など、将来を見据えた音楽啓蒙活動も精力的に行う。

1992年に非営利団体「Midori & Friends」(ニューヨーク)と「みどり教育財団東京オフィス」(現・認定NPO法人ミュージック・シェアリング)を設立。25年にわたるその活動は、常に時代や社会のニーズに合わせ進化を続け、その先進性・独自性は、音楽家による社会貢献活動のロールモデルの範疇を超え、社会に幅広い影響を与えている。

後進の指導にも情熱を注ぎ、現在、南カリフォルニア大学ソーントン音楽学



©T.Sanders

校弦楽学部「ハイフェッツ・チェアー」兼特別教授。相愛大学客員教授。

2007年より国連ピース・メッセンジャーとして、貧困、平和、環境、教育、女性問題など、国連が掲げる多種多様な課題に積極的に取り組む。

録音はソニー・クラシカル、ONDINE、ONYXよりリリース。ソリストとして参加した《パウル・ヒンデミット作品集》は第56回グラミー賞最優秀クラシック・コンペンディウム賞(2014年)を受賞。

使用楽器はガエルネリ・デル・ジェス「エクス・フーベルマン」(1734年作)。

◇10月19日 定期演奏会

P
rogram notes

楽曲紹介

10.2 [日]

柴田克彦 (しばた かつひこ)・音楽ライター

ベルリオーズ 序曲〈ローマの謝肉祭〉 作品9

作曲: 1843年 / 初演: 1844年2月3日、パリ / 演奏時間: 約8分

フランス初期ロマン派の革新的作曲家エクトル・ベルリオーズ(1803~69)による演奏会用の序曲。ベルリオーズ屈指の人気曲でもある。1830年初演の〈幻想交響曲〉で名を上げた彼は、オペラでの成功を期して、1838年に〈ベンヴェヌート・チェッリーニ〉を完成した。しかし、同年パリ・オペラ座における初演は不成功に終わり、間もなく打ち切りとなった。そこで失地を回復すべく、同オペラの劇中の素材を用いて作曲した(もともとは第2幕の序曲として書かれたとの説もある)のが本作。1844年、ベルリオーズ自身の指揮で初演され、大成功を収めた。

ちなみに、〈ベンヴェヌート・チェッリーニ〉は、「ルネサンス時代のイタリアの彫金師チェッリーニが、苦難

を経てペルセウス像を完成し、愛するテレーザと結ばれる」といった物語。このオペラ自体にも、ベルリオーズがかつてイタリアで見聞した謝肉祭の印象が反映されている。

曲は、作曲者一流の華麗なオーケストレーションが生かされた、活気みなぎる音楽。激しく始まり、すぐにテンポを落として、チェッリーニとテレーザの「愛の二重唱」の主題が、イングリッシュ・ホルンのソロで奏される。同主題が他の楽器に受け渡されている、木管楽器の急速な動きに導かれて快速部分へ移行。「謝肉祭の合唱」に基づく旋律が奏された後、打楽器群が一斉に加わって、イタリアの急速な舞曲サルタレッロ風の賑やかな音楽となり、熱狂の度合いを高めていく。

楽器編成 / フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(タンブリン、シンバル、トライアングル)、弦五部

ビゼー 〈アルルの女〉第2組曲

作曲：1872年／初演：1872年10月1日、パリ（劇付随音楽）／演奏時間：約18分

〈アルルの女〉は、ロマン派時代のフランスの天才作曲家ジョルジュ・ビゼー（1838～75）が、同国の作家ドーデ作の3幕の劇のために書いた付随音楽。パリのヴォードヴィル座の支配人カルヴァロからの依頼によって、1872年に作曲及び初演された。劇自体は、「南仏プロヴァンス地方の農村の旧家の長男フレデリは、アルルの町で知り合った妖艶な女に恋するが、家族に反対された上、彼女に情夫がいることもわかって、幼なじみの村娘と婚約する。だが祭りの日、婚約を祝う場に来たアルルの女の情夫から『今夜駆け落ちする』と聞いて嫉妬に狂い、穀物倉の高窓から身を投げる」といった悲惨な物語。ただし、アルルの女自体は劇中に一度も登場しない。

ビゼーは、この劇のために小編成の付随音楽を27曲作曲した。劇の評判は今ひとつだったが、音楽に自信のあった彼は、特に気に入っている4曲を、フル編成の演奏会用組曲に編曲。これが第1組曲となった。さらに作曲者の死後、友人の作曲家エルネスト・ギロー（1837～92）が、別の3曲にビゼー

の歌劇〈美しきパースの娘〉（1867年初演）の“メヌエット”を加えた第2組曲を編纂。以後、稀代のメロディメーカーの面目躍如たる両組曲は、歌劇〈カルメン〉と並ぶビゼーの代表作となった。なお、今回のように第2組曲のみが演奏されるケースもきわめて多い。

第1曲“パストラール” 第2幕の前奏曲と開幕直後の合唱部分。力強く広々とした田園曲で、中間部はプロヴァンス太鼓をまじえた田舎風の舞曲となる。

第2曲“間奏曲” 第2幕の間奏曲。荘厳な前奏に続いて、サクソフォンがメランコリックかつ敬虔な旋律を奏で、最後に前奏のフレーズが戻る。

第3曲“メヌエット” ハープの伴奏に乗ってフルートが歌う優美な主部に、力強い中間部が挟まれる。〈美しきパースの娘〉からの借用ながら、〈アルルの女〉の代名詞となった1曲。フルート用の小品としても親しまれている。

第4曲“ファランドール” 劇の最終場面。プロヴァンスの民謡「3人の王の行列」を用いた行進曲から、村人たちが踊る舞曲に移り、二つの旋律を組み合わせた迫力満点のクライマックスに至る。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、アルト・サクソフォン、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（シンバル、大太鼓、プロヴァンス太鼓）、ハープ、弦五部

ベルリオーズ 幻想交響曲 作品14

作曲：1830年／初演：1830年12月5日、パリ／演奏時間：約49分

ベルリオーズ初の成功作にして、歴史的な革新作。1827年、パリ音楽院に学ぶ彼は、英国から来たシェイクスピア劇団の女優ハリエット・スミッソンに恋心を抱き、無謀にも求愛して失恋する。そして1830年、その恨みをこめる形で本作を作曲した。

曲は、「ある芸術家の生涯のエピソード」の副題と、全体及び各楽章に標題をもっている。全体の標題は「失恋した芸術家がアヘンで自殺を図るが、死に至らず、昏睡状態で奇怪な幻想を見る。その中で恋人はいつも決まった旋律として現れる」。この“標題交響曲”の発想と、恋人の旋律が全楽章に登場する“固定楽想”の手法は、リストやワーグナーなどに大きな影響を与えた。

有名な交響曲では初となる楽器法も特徴。例を挙げると、第2楽章の2台のハープ、第3楽章のイングリッシュ・ホルン、舞台裏のオーボエ、4人で奏するティンパニ、第5楽章のエスクラリネット、2本のチューバ、舞台裏の鐘、弦を弓の背で擦る「コロ・レーニョ奏法」など。かような作品がベートーヴェンの死のわずか3年後に書かれ

たのは、まさに驚きだ。

以下、「 」内は標題の要約。

第1楽章“夢と情熱” ラルゴ～アレグロ・アジタート・エ・アパッショナート・アッサイ。「恋人に巡り会う前の不安と憧れ。やがて恋人に出会う」。フルートとヴァイオリンで流麗に奏されるのが固定楽想。情熱と不安が同居した音楽。

第2楽章“舞踏会” ワルツ、アレグロ・ノン・トロppo。「舞踏会で見え隠れする恋人の姿」。当時の交響曲では異例のワルツ楽章。

第3楽章“野の情景” アダージョ。「夏の夕べ。二人の牧童の笛、かすかな希望。裏切りへの不安。遠雷、静寂」。孤独感と静寂感が支配する緩徐楽章。

第4楽章“断頭台への行進” アレグレット・ノン・トロppo。「嫉妬に狂って恋人を殺害した芸術家は、死刑を宣告され断頭台へ」。壮絶な行進曲。

第5楽章“ワルブルギスの夜の夢” ラルゲット～アレグロ。「埋葬に集う魔物たち。恋人は下品な笑いを浮かべている。『怒りの日』（グレゴリオ聖歌）が鳴り響き、狂宴はクライマックスとなる」。狂乱のフィナーレ。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2（エスクラリネット持替）、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コロネット2、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓）、ハープ2、バンダ（オーボエ、鐘）、弦五部

10.8 [土]

10.9 [日]

10.10 [月・祝]

飯尾洋一 (いいお よういち)・音楽ライター

ラモー

〈カストールとポリュックス〉組曲

作曲：1737年、1754年改訂／初演：1737年、パリ／演奏時間：約17分

ジャン＝フィリップ・ラモー（1683～1764）はフランスのバロック期を代表する作曲家。オルガニストの父のもとディジョンで生まれ、18歳でイタリアに留学し、帰国するとフランス各地でオルガニストを務めた。『和声論』他の理論書の著作によって音楽理論家として名を成すが、オペラ作曲家となる野心を持ち続け、1733年、50歳にしてようやく念願のオペラ第1作である叙情悲劇（トラジェディ・リリック）〈イポリトとアリシ〉初演にこぎつけた。これに続く、第2作として発表されたのが叙情悲劇〈カストールとポリュックス〉である。以後、81歳を目前に世を去るまで活動を続け、多数の劇音楽を残すこととなった。

〈カストールとポリュックス〉の台本はピエール＝ジョゼフ・ベルナルによるギリシャ神話に基づくもの。戦で恋人カストールを失って悲しむ太陽

神の娘テライールに、カストールの異父兄ポリュックスが求愛する。テライールはこれを拒み、ポリュックスの父ジュピターにカストールを冥界から戻してほしいと望む。ポリュックスは愛を断念し、カストールの身代わりとなることを申し出る。これによってカストールは一日だけの生を取り戻して生き返る。テライールは喜び、カストールを引き留めようとするが、カストールは兄のために約束通り冥界へ帰ろうとする。二人の兄弟愛に打たれたジュピターは、兄弟に永遠の命を与えて、天上にふたご座を作る。

ラモーの多くの劇音楽作品と同様に、この作品も声楽を除いた管弦楽組曲がさまざまな選曲によってしばしば演奏されている。本日は、典雅で哀感漂う“序曲”、軽やかな“ガヴォット”、活発な“タンブラン”、輝かしい“シャコンヌ”の4曲が演奏される。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、打楽器（小太鼓）、弦五部

モーツァルト
ピアノ協奏曲 第15番 変ロ長調 K.450

作曲：1784年／初演：1784年、ウィーン／演奏時間：約25分

1781年、故郷ザルツブルクの宮廷楽団と袂を分かち、ウィーンに定住することを決めたヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は、フリーランスの音楽家として生計を立てることになった。モーツァルトはピアノリストとして自作を演奏し、自ら演奏会を催すことで、オペラの作曲やレッスンと並ぶ収入を確保していた。モーツァルトの評判が高まるとともに、演奏会の呼び物であるピアノ協奏曲の作曲も盛んになる。その人気が頂点に達した1784年には、1年間で6曲ものピアノ協奏曲が生み出されることとなった。ピアノ協奏曲第15番はそんな順風満帆の充実期に書かれた一曲である。

モーツァルトは同時期に書かれたピアノ協奏曲第16番二長調、第17番ト長調とともに、この第15番を「大協奏曲」と呼び、当時の協奏曲としては編成の大きな管楽器群を採用した。フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2の管楽器は現代の基準からすればきわめて簡素だが、弦楽器や独奏楽器の補強以上の役割が与えられており、当時の保守的な聴衆からは伴奏があまりに

重々しいという声もあがったという。

父レオポルトに宛てた手紙のなかで、モーツァルトはこの協奏曲を「演奏者に汗をかかせる作品」とであると記している。明朗快活な楽想のなかで、独奏者の華やかな技巧が際立つ。

第1楽章 アレグロ あたかも前口上のように、オーボエとファゴットによる語りかけるような序奏で始まり、ヴァイオリンが返答する。流麗できらびやかな独奏ピアノが縦横無尽に駆け巡る。作曲者自身が残したアピール度満点のカデンツァが、誇らしげに独奏者のスター性を引き立てる。

第2楽章 アンダンテ 変奏曲形式で書かれる。やさしく包み込むような主題で開始され、これに二つの変奏とコーダが続く。繊細で陰影に富んだ表情が生み出される。

第3楽章 アレグロ 華麗なピアノ独奏と彩り豊かな管弦楽が作り出す、軽快で浮き立つようなフィナーレ。この楽章でようやく加わるフルートがいつもの明るさを添える。胸を躍らせるように波打つコーダも実に効果的。あたかも次作への期待感を煽るかのような幕切れである。

楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏ピアノ

シューベルト 交響曲 第8番 ハ長調 D 944 〈グレイト〉

作曲：1825～28年／初演：1839年3月21日、ライプツィヒ／演奏時間：約48分

フランツ・シューベルト（1797～1828）の交響曲はいずれも生前に公開演奏された記録がない。交響曲第8番〈グレイト〉も例外ではなく、この奇跡のような傑作が初演されたのは、作曲者の死後10年あまりを経た1839年3月21日のこと。メンデルスゾーン指揮ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏によって、ようやく日の目を見ることになった。死後の名声に比して、作曲家が生前に手にした栄光はあまりに小さい。

初演にはシューマンの尽力があった。1838年から39年にかけてウィーンに滞在したシューマンは、シューベルトの遺稿を兄フェルディナントの家で目にし、そのなかから〈グレイト〉の楽譜を発見する。作品の価値にすぐさま気づいたシューマンは、楽譜を盟友メンデルスゾーンのもとに送り、初演を実現させた。

シューマンは偉大な作品に出会った感激と興奮を、自らが主宰する『新音楽時報』に綴っている。この際に用いられた「天国的に長い」という作品評はしばしば引用される。シューマンは

「この曲はジャン・パウルの大長篇小説に劣らず、天国のように長い。どちらにも終わらないことには理由があり、受け手に次はどうなるのかと考えさせて、終わらないのだ」「ほかの曲では今にも終わるのかと思って心配しなければならない」と述べ、〈グレイト〉の終わることのない長さを称揚している。そこには、物理的な長さにとどまらず、反復的な楽想からあふれ出る詩情が決して尽きないという、永遠性への憧憬が込められているにちがいない。

第1楽章 アンダンテ～アレグロ・マ・ノン・トロppo 晴朗で質朴な主題で始まり、壮大な楽想をくりひろげる。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート せきばく 寂寞としたオーボエの主題が印象的。強弱の対比、明暗の対比が鮮やか。

第3楽章 スケルツォ：アレグロ・ヴィヴァーチェ 巨体をゆるするようなおどけたスケルツォの間に、可憐なトリオがはさまれる。

第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ まばゆいばかりに歓喜を爆発させる長大なフィナーレ。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

10.14 [金]

道下京子（みちした きょうこ）・音楽評論家

シューベルト 劇音楽〈ロザムンデ〉から

作曲：1823年秋／初演：1823年12月20日、ウィーン／演奏時間：約10分（序曲）、約8分（間奏曲）、約7分（バレエ音楽）

音楽史上、「歌曲の王」と呼ばれるフランツ・シューベルト（1797～1828）は、数多くの歌曲（リート）を書き上げ、これらは多くの人に親しまれてきた。その一方で、彼は歌劇（オペラとジグシュピール）もいくつか創作しているものの、そのほとんどはめったに上演されることはない。しかし、彼は早い時期からオペラの作曲を手掛けており、舞台音楽に強い関心を寄せていた。演劇の付随音楽については、シューベルトは〈ロザムンデ〉のほかに、〈魔法の堅琴〉も作曲している。

本日演奏されるのは、劇『ロザムンデ、キプロスの女王』（全4幕）のための付随音楽である。台本を担当したのは、ウェーバーが作曲した歌劇〈オイリュアンテ〉にもたずさわったテルミナ・フォン・シェギー。彼女は、ウェーバーのこの歌劇が初演された1823年10月以降に、〈ロザムンデ〉の台本に着手する。そのために劇全体の創作

は、きわめて短い時間のうちに行われざるを得なかった。シューベルトの創作の筆は追いつかず、12月に行われた〈ロザムンデ〉の初演では、自作の歌劇〈アルフォンソとエストレッラ〉の序曲を使用し、のちには同じく自作の付随音楽〈魔法の堅琴〉の序曲に差し替えた。

この劇音楽は、序曲を含めて10曲からなる。そのうち、本日は3曲が披露される。

序曲 付随音楽〈魔法の堅琴〉序曲からの転用。重々しいハ短調の序奏ののち、ハ長調による軽快な主部が続く。

間奏曲 第3番 第3幕と第4幕の間に演奏される。第1ヴァイオリンが奏でるメロディは、ピアノ曲〈即興曲〉D 935-3や弦楽四重奏曲第13番〈ロザムンデ〉D 804に取り入れられた。

バレエ音楽 第2番 この劇音楽の最後に置かれた曲。弾むような低弦楽器に導かれ、典雅なメロディが現れる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ベルリオーズ 夏の夜 作品7

作曲：1840～41年／初演：不明／演奏時間：約31分

エクトル・ベルリオーズ（1803～69）は、フランスのロマン派を代表する作曲家。医師であった父と同じく医学を志すものの、音楽への思いがまさり、1823年にパリ音楽院へ入学。彼は当時の若手作曲家の登竜門、ローマ大賞に何度も応募し、1830年にカンタータ〈サルダナパールの死〉でこの賞を獲得。同年には代表作となる〈幻想交響曲〉も完成・初演された。

管弦楽曲やオペラの作品で名を馳せたベルリオーズ。声楽に精通している彼は、歌曲もいくつか作曲している。〈夏の夜〉は、メゾ・ソプラノあるいはテノールのための六つの歌曲からなり、1840年から41年にかけて書き上げられた。テキストは、ベルリオーズの友人でフランスの詩人、テオフィル・ゴージェ（1811～72）の『死の喜劇』という詩集に基づく。

本来は声とピアノによる作品で、完成したその年のうちに出版された。のちに歌手マリー・レシオのために、1843年に第4曲をオーケストラ伴奏へと編み直したのを嚆矢として、残りの5曲のオーケストレーションも1850年代半ばまでに行われる。この歌曲が作

曲された当時、彼は〈幻想交響曲〉のモデルとなった妻で女優のハリエットとは、不仲となっていた。彼女の死後、ベルリオーズはレシオと再婚する。

第1曲“ヴィラネル” へ長調。軽快な刻みの伴奏とともに、春の到来を待ちわびた恋人たちを歌う。

第2曲“ばらの精” 二長調。少女はばらの花をつけて舞踏会へ臨んだ。夜、眠りについた少女にばらの精が語りかける。ゆったりと波打つような調べを奏でるヴィオラとともに、息の長い旋律が歌われる。

第3曲“入江のほとり” ト短調。恋人を亡くした船乗りの悲しみを表した歌。

第4曲“君なくて” へ長調。音楽は、呼びかけるようなカノンで始まる。失恋した男が、恋人に「帰ってきておくれ」と歌う。

第5曲“墓地で” 変ロ長調。墓場に眠る人の思いを表した歌。巧みな和音の変化が音楽に彩りを添える。

第6曲“未知の島” へ長調。恋人の旅にいざなう歌。憧れの地への思いが音楽にも映し出されている。

楽器編成／フルート2、オーボエ、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、ハープ、弦五部、独唱メゾ・ソプラノ

夏の夜 LES NUITS D'ÉTÉ

テオフィル・ゴージェ詩 poèmes originaux de Théophile Gautier

訳：美山良夫

VILLANELLE

à Mlle Wolf, artiste à la chapelle ducale de Weimar

[Villanelle rythmique]*

Quand viendra la saison nouvelle,
Quand auront disparu les froids,
Tous les deux nous irons, ma belle,
Pour cueillir le muguet aux bois;
Sous nos pieds égrenant les perles
Que l'on voit au matin trembler,
Nous irons écouter les merles Siffler.

Le printemps est venu, ma belle,
C'est le mois des amants béni,
Et l'oiseau, satinant son aile,
Dit ses [des] vers au rebord du nid.
Oh, viens donc, sur ce [le] banc de mousse
Pour parler de nos beaux amours,
Et dis-moi de ta voix si douce:
<<Toujours!>>

Loin, bien loin, égarant nos courses,
Faisant [Faisons] fuir le lapin caché,
Et le daim au miroir des sources
Admirant son grand bois penché;
Puis chez nous, tout heureux [joyeux], tout aises,
En paniers enlaçant nos doigts,
Revenons, rapportant des fraises
Des bois.

LE SPECTRE DE LA ROSE

à Mlle Falconi, artiste à la chapelle ducale de Gotha

Soulève ta paupière close
Qu'effleure un songe virginal.
Je suis le spectre d'une rose
Que tu portais hier au bal.
Tu me pris encore emperlée
Des pleurs d'argent de l'arrosoir,
Et parmi la fête étoilée
Tu me promenais tout le soir.

Ô toi, qui de ma mort fus cause,
Sans que tu puisses le chasser,
Toutes les nuits mon spectre rose

ヴィラネル

ヴァイマル公宮廷歌手ヴォルフ嬢に捧ぐ

[脚韻つきのヴィラネル]

新しい季節がめぐってきて、
寒さが遠のいたら、
僕たち二人、ねえ、
森へ鈴蘭を摘みに行こうよ。
実を摘んでいる僕たちの足許では
真珠のような霧が朝に震えているようだよ、
聞きに行こうよ、つぐみが鳴くのを。

春がやってきたのだよ、さあ、
幸せな恋人たちの季節だ、
小鳥もその翼に光沢をつけ
巢の入口で詩を語っている
おいで、この苔の長椅子のところへ
僕たちの美しい恋を語るために、
君の甘い声で話しておくれ
いつまでも！

遠く、ずっと遠くの方に行方をくらまして
隠れた兎を逃がしてやり、
泉に映る自分の大きな曲がった角に
見とれる鹿もほうっておこう。
僕たちは、とても幸せに、気も軽く、
籠の中で指をからませている、
帰ろうよ、苺をもって
森から。

ばらの精

ゴータ公宮廷歌手ファルコーニ嬢に捧ぐ

あなたの閉じた顔をそっとあげて
乙女の夢を摘みとってごらん
私は、あなたがきのう舞踏会でつけていた
ばらの精。
あなたは今も、身につけたまま、
如露からの銀の涙を。
星が燦めく祝祭の中で
あなたは一晩中、私を連れて歩いたのよ。

おお、私に死をもたらしたあなた、
あなたが追い払わぬかぎり
私のばらの精は夜ごとに

A ton chevet viendra danser.
Mais ne crains rien, je ne réclame
Ni messe ni *De Profundis*;
Ce léger parfum est mon âme
Et j'arrive du paradis.

Mon destin fut digne d'envie,
Et pour avoir un sort si beau
Plus d'un aurait donné sa vie,
Car sur ton sein j'ai mon tombeau,
[Car j'ai ta gorge pour tombeau,]
Et sur l'albâtre où je repose
Un poète avec un baiser
Ecrivit: <<Ci-gît une rose
Que tous les rois vont jalouser.>>

SUR LES LAGUNES: Lamento

à M. Milde, artiste à la chapelle ducale de Weimar

[Lamento: La Chanson du pêcheur]

Ma belle amie est morte;
Je pleurerai toujours;
Sous la tombe elle emporte
Mon âme et mes amours.
Dans le ciel, sans m'attendre,
Elle s'en retourna;
L'ange qui l'emmena
Ne voulut pas me prendre.
Que mon sort est amer!
Ah, sans amour s'en aller sur la mer!

La blanche créature
Est couchée au cercueil.
Comme dans la nature
Tout me paraît en deuil!
La colombe oubliée
Pleure et songe à l'absent;
Mon âme pleure et sent
Qu'elle est dépareillée.
Que mon sort est amer!
Ah, sans amour s'en aller sur la mer!

Sur moi la nuit immense
S'étend comme un linceul;
Je chante ma romance
Que le ciel entend seul.
Ah, comme elle était belle
Et comme je l'aimais!
Je n'aimerai jamais
Une femme autant qu'elle.
Que mon sort est amer!
Ah, sans amour s'en aller sur la mer!

あなたの枕もとにやってきて踊るでしょう。
けれど、少しも怖がることはないわ、私は
ミサも「深き^{ふかき}淵より」も求めてはいないの。
この軽やかな香りこそ、私の魂よ
そして、私はやってくるわ、天国から。

したいように振る舞うのが私の^{きだめ}運命
こんなにしてきな運命を
他のものと代えようなどとは思わないわ。
だって、私の墓はあなたの胸の上にあるのだから。
[だって私はあなたの生命を握っているのですもの]
私がやすらかに眠るその純白な胸に
一人の詩人は、くちづけして
こう書いたのよ：「あらゆる王をして嫉妬せしめし
一輪のばら、ここに横たわりぬ」。

入江のほとり：哀歌

ヴァイマル公宮廷歌手ミルデ氏に捧ぐ

[哀歌：漁夫の歌]

私の美しい恋人は死んでしまった、
私はいつも泣きつづけるだろう。
墓の中に、あの人は持って行ってしまった、
私の魂と私たちの愛を。
私を待たないで、天国へと
彼女は帰って行くのだろう。
あの人を導いて行く天使は
私と一緒に連れて行ってはくれなかった。
何と私の運命の苛酷なことか！
ああ、愛もなく海へ船出して行くとは！

白^{ひつぎ}いからだは
棺の中に横たわっている。
世の中すべてが、私には
喪に服しているかのようだ！
置き去りにされた鳩は
泣き、死んだ人のことを想う。
私の魂は涙にくれ、連れそう人が
いなくなってしまうと悲しむ。
ああ、何と私の運命の苛酷なことか！
愛もなく海へ船出して行くとは！

私の上には巨大な闇が
屍衣のようにひろがっている。
私は恋^{ロマンス}の歌を歌ってはみるが、
それを聞くのは大空ばかり。
ああ、何とあの人は美しかったのだろう、
どんなにあの人を私が愛していたことか！
もう決して愛することはないだろう、
あの人以外の女性を、
何と私の運命の苛酷なことか！
ああ、愛もなく海へ船出して行くとは！

ABSENCE

à Mme Nottès, artiste à la chapelle royale de Hanovre

Reviens, reviens, ma bien-aimée!
Comme une fleur loin du soleil
La fleur de ma vie est fermée
Loin de ton sourire vermeil.

Entre nos cœurs quelle distance!
Tant d'espace entre nos baisers!
Ô sort amer! Ô dure absence!
Ô grands désirs inapaisés!

Reviens, reviens, ma bien-aimée! etc.

D'ici là-bas, que de campagnes,
Que de villes et de hameaux,
Que de vallons et de montagnes,
A lasser le pied des chevaux!

Reviens, reviens, ma bien-aimée! etc.

AU CIMETIÈRE

Clair de Lune

à M. Caspari, artiste à la chapelle ducale de Weimar

[Lamento]

Connaissez-vous la blanche tombe
Où flotte avec un son plaintif
L'ombre d'un if?
Sur l'if une pâle colombe,
Triste et seule au soleil couchant,
Chante son chant:

Un air maladivement tendre,
A la fois charmant et fatal,
Qui vous fait mal,
Et qu'on voudrait toujours entendre;
Un air, comme en soupire aux cieux
L'ange amoureux.

On dirait que l'âme éveillée
Pleure sous terre à l'unisson
De la chanson,
Et du malheur d'être oubliée
Se plaint dans un roucoulement
Bien doucement.

Sur les ailes de la musique
On sent lentement revenir
Un souvenir;
Un ombre, une forme angélique
Passe dans un rayon tremblant
En voile blanc.

君なくて

ハノーファー王室歌手ノッテス夫人に捧ぐ

帰っておいで、帰っておいで、私の愛する人よ！
陽光から遠ざかった花のように
私の生命の花はしぼんでしまった、
あなたの紅色の微笑から遠ざかって。

私たちの心と心の、何という大きな隔たり！
私たちのくちづけの何という間隔！
つらい運命！ 厳しい孤独！
大きな望みは満たされぬまま！

帰っておいで、帰っておいで、私の愛する人よ！…

ここからあなたのところまで、野や
街や村が
谷や山がどんなにあるのだろう
馬の脚も疲れさせるほどに！

帰っておいで、帰っておいで、私の愛する人よ！…

墓地で

月の光

ヴァイマル公宮廷歌手カスパーリ氏に捧ぐ

[哀歌]

知っていますか、水松^{いちい}の木の影が
悲しい音をたてながら
ゆらめいているあの白い墓を？
水松の木の^{あお}上には、蒼ざめた一羽の鳩が
悲しげに、たったひとりで夕日の中で
歌を歌っている

調べは病的なほど甘く、
なまめかしく、また抗し難く、
あなたを^{さいな}苛むけれど、
それでも、いつも聞かずにはいられない。
調べは、愛の天使が
天国で恋に嘆息しているかのよう。

目ざめた魂が
その歌声に声を合わせて
大地の下で涙を流しているという。
そして、残された者の不幸を
いとも甘美に鳩の鳴き声で
嘆いているという。

その調べの翼に乗って
想い出がゆっくりと
戻ってくるようです。
天使の形をした一つの影が
ゆらめく光線の中を通りすぎて行く、
白いヴェールを覆って。

ベートーヴェン 交響曲 第8番 ヘ長調 作品93

作曲：1812年／初演：1814年2月27日、ウィーン／演奏時間：約26分

Les belles de nuit, demi-closes,
Jettent leur parfum faible et doux
Autour de vous,
Et le fantôme aux molles poses
Murmure en vous tendant les bras:
<<Tu reviendras!>>

Oh jamais plus, près de la tombe,
Je n'irai, quand descend le soir
Au manteau noir,
Ecouter la pâle colombe
Chanter sur la pointe de l'if
Son chant plaintif!

L'ÎLE INCONNUE

à Mme Milde, artiste à la chapelle ducale de Weimar

[Barcarolle]

Dites, la jeune belle,
Où voulez-vous aller?
La voile enfle son aile,
La brise va souffler!

L'aviron est d'ivoire,
Le pavillon de moire,
Le gouvernail d'or fin;
J'ai pour lest une orange,
Pour voile une aile d'ange.
Pour mousse un séraphin.

Dites, la jeune belle, etc.

Est-ce dans la Baltique,
Dans la mer Pacifique,
Dans l'île de Java?
Ou bien est-ce en Norvège,
Cueillir la fleur de neige,
Ou la fleur d'Angsoka?

Dites, la jeune belle,
Où voulez-vous aller?

Menez-moi, dit la belle,
A la rive fidèle
Où l'on aime toujours.
-Cette rive, ma chère,
On ne la connaît guère
Au pays des amours.

Où voulez-vous aller?
La brise va souffler!

*Le texte original et les titres de Gautier ont été rétablis entre crochets.

夜の美女たちは、半ば眼を閉じ、
かそけく甘い香りを
あなたの周囲に投げかけている。
そして幻影は、物憂げな姿で
あなたに手をさしのべて囁く：
「あなたは戻ってくるだろう」と！

おお！ もう決して、墓のそばで、
夜が黒いマントを着てあたりをつつむ時に、
水松の木の白っぽい先端で
蒼ざめた鳩が
その嘆きの歌を歌うのを
聞きに行きはしない。

未知の島

ヴァイマル公宮廷歌手ミルデ夫人に捧ぐ

[舟歌]

美しい乙女よ、いってください。
どこに行こうとしているのですか？
帆は翼をひろげ
そよ風が吹き始めます。

帆は象牙で
トルコの織物の天幕
すばらしい黄金の舵。
脚荷にはオレンジ一つ
帆には天使の翼
水夫には天使セラフィム。

美しい乙女よ、いってください…

ここはバルティック海か？
太平洋のただなかか？
それともジャワ島か？
あるいはここはノルウェーで
雪の花か
アングソカの花を摘もうというのか？

美しい乙女よ、いってください、
どこに行こうとしているのですか？

美しい人はいう、「私を連れて行って、
いつも愛し合える
誠実の岸辺へ」と！
私のいといい人よ、この岸辺を
知っている人は、愛の国に
一人もいないのだよ。

どこへ行こうとしているのですか？
そよ風が吹き始めます！

*ゲーティエのオリジナルの詩と題名は[]内に示した。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は、1812年に2曲の交響曲を書き上げた。すなわち、第7番と第8番である。ドラマティックな性格の第7番に対し、第8番はコンパクトにまとめられた古典的な交響曲と言える。ただし、第8番はたんに古典的明晰さを特徴とするにとどまらず、さまざまな趣向も凝らされている。作品は、先に完成・初演された交響曲第7番などととも、1814年に初演された。

また1812年7月、つまり第8番の交響曲の創作期間中、ベートーヴェンは「不滅の恋人」への手紙を書いている。その「不滅の恋人」とは誰のことなのかは記されていないものの、近年の研究ではアントーニエ・ブレンターノとの推測もある。

第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ・エ・コン・ブリオ ヘ長調。オーケストラの全奏によって晴れやかに始まる。音楽は、第1主題部から微細にハーモニーを変え、舞踏のような典雅な趣を漂わせるイ長調の第2主題を導いてゆく。ソナタ形式で書かれており、作品はシンプルながら堅固に構築されている。
第2楽章 アレグレット・スケルツァン

ド 変ロ長調。木管楽器が一条乱れずに音符を刻む中、第1ヴァイオリンがメロディを奏でてゆく。多彩なリズムやメリハリのある強弱が示されており、スケルツォ的な性格を帯びている。このメロディは、メルツェルが考案したとして知られるメトロノームを賛美して、ベートーヴェンが作曲した〈タタ・カノン〉WoO162からの転用と考えられていた。しかし、このカノンは弟子のシントラーの偽作であり、この第2楽章のメロディをもとにシントラーが作曲したとされる。

第3楽章 テンポ・ディ・メヌエット ヘ長調。舞踏風の楽想の主部と、クラリネットと2本のホルンの牧歌的な三重奏が印象的なトリオからなる。ベートーヴェンの交響曲でメヌエット楽章が置かれるのは、第1番以来。

第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ ヘ長調。ロンドの性格を帯びたソナタ形式と言える。第1主題では、振幅の大きな強弱とともに、特徴的な三連符が打ち鳴らされる。第2主題は変イ長調で、美しい旋律線が紡がれる。コーダでは、長大なクライマックスが築き上げられ、活力に満ちあふれている。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

シューベルト (ウェーベルン編)
6つのドイツ舞曲 D 820

作曲: 1824年 (シューベルト作曲)、1931年 (ウェーベルン編曲) / 初演: 1931年10月25日、ベルリン / 演奏時間: 約9分

ウィーン生まれのアントン・ウェーベルン (1883～1945) は、師のシューベルト、同門のベルクとともに新ウィーン楽派の一翼を担う作曲家である。後期ロマン派の音楽から出発し、極小形式 (アフォリズム) の無調、12音技法による作品を手がけ、その音楽は、第2次大戦後の前衛作曲家たちに多大な影響を与えた。

編曲の腕を評価されていたウェーベルンは、1931年にウィーンのユニヴェルザール出版社から依頼され、フランツ・シューベルト (1797～1828) の〈6つのドイツ舞曲〉をオーケストラ用に編曲した。1824年10月に書かれた鍵盤楽器のための作品が原曲である。

シューベルトは、この年の夏から秋にかけてエステルハーゼ侯爵家の音楽教師として、ハンガリーのツェレスの館に滞在した。この家の姉妹にピアノを教えながら、ピアノ連弾曲や小品な

どを書いた。〈6つのドイツ舞曲〉もそのひとつで、シューベルトが想いを寄せていた妹のカロリーネのために作られたのではないかと推測されている。

その後、長らく忘れ去られていたが、20世紀に入ると、ウィーンでシューベルト没後100年を記念した催しが行われるなど作曲家の再評価の機運が高まり、ウィーン楽友協会の資料からこの作品が発見され、ウェーベルンによって再び光が当てられた。

全体は、しなやかな前半 (変イ長調) と勇壮な後半 (変ロ長調) の二つのグループから成り、それぞれダ・カーポでグループ最初の舞曲が繰り返される (第1、2、1、3、1曲、第4、5、4、6、4曲の順番となる)。第3曲では全弦楽器が独奏とトゥッティに分かれ、第5曲でヴァイオリン独奏が現れる。拍節やアクセントが強調され、きびきびとした表情を作り出している。

楽器編成 / フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦五部

コルンゴルト
ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35

作曲: 1945年 / 初演: 1947年2月15日、セントルイス / 約24分

マーラーに才能を認められ、ツェムリンスキーに作曲を師事したウィーン作曲家エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト (1897～1957) は、「モーツァルト以来の天才」と言われ、少年時代から驚異的な音楽的才能を発揮した。オーケストラ曲で自信を深めると、オペラにも取り組み、3作目の〈死の都〉(1920) で若くしてオペラ作曲家としての名声を不動のものとした。

ナチスの台頭でウィーンでの活動が困難になると、1934年にアメリカに渡り、ハリウッドに活躍の場を見出した。1946年まで21本の映画音楽を手がけ、アカデミー賞作曲賞に4回ノミネートされるなど、輝かしい成功を収めた。

戦争が終結すると、コルンゴルトはクラシック音楽の世界に復帰する。二つの世界を軽やかに横断して書かれたこのヴァイオリン協奏曲は、映画音楽の旋律が巧みに用いられ、木管楽器やハープを効果的に用いたオーケストレーションもハリウッド仕込みである。1947年のハイフェッツの独奏による初演は、大成功を収めた。「凡庸で感傷的」とする批評家もいたが、ハイフ

ェッツはすっかり気に入って、すぐにニューヨークやシカゴで演奏した。なお、この作品は、ウィーン時代から作曲家を知り、「神童」と驚嘆したマーラーの妻、アルマに献呈されている。

第1楽章 モデラート・ノビレ 独奏ヴァイオリンの大きな第1主題は映画『砂漠の朝』(1936～37)、軽快で技巧的な経過部をはさみ、ゆるやかで甘美な第2主題は『革命児ファレス』(1938～39) に由来する。重音と跳躍音程が連続する力強いカデンツァを経て、再現部に入る。

第2楽章 ロマンズ: アンダンテ オーケストラの和声的な導入に続いて、『風雲児アドヴァース』(1936) による旋律が独奏ヴァイオリンでたつぷりと歌われる。中間部は、ヴァイオリンの細やかな動きがいっそう際立つ。

第3楽章 フィナーレ: アレグロ・アッサイ・ヴィヴァーチェ 『放浪の王子』(1937) の旋律に基づく快活な舞曲風の音楽。独奏ヴァイオリンの技巧的なパッセージの連続と歌心に満ちた旋律が交替する。ハリウッド映画のような壮大なドラマが音楽で描かれる。

楽器編成 / フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2 (コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、打楽器 (グロッケンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、シンバル、大太鼓)、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

J. M. シュタウト ヴァイオリン協奏曲〈オスカー〉（日本初演）

作曲：2014年／初演：2014年8月27日、ルツェルン／演奏時間：約18分

ドイツ・オーストリアの現代作曲家のなかでいま最も目覚ましい活躍をしている中堅作曲家といえば、ヨハネス・マリア・シュタウト（1974～）とイェルク・ヴィトマン（1973～）の二人の名前がまず挙げられるのではないだろうか。それぞれサイモン・ラトル指揮のベルリン・フィル、ピエール・ブーレーズ指揮のウィーン・フィルによって委嘱作品が初演されるなど、オペラから独奏曲まで幅広いジャンルに刺激的な作品を書いている。

本日の作曲家シュタウトは、オーストリアのインスブルックに生まれた。ウィーン音楽大学でミカエル・ジャレル（1958～）に作曲、ウィーン大学で哲学と音楽学を学び、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学でハンスペーター・キブルツ（1960～）に師事した。さらにブライアン・ファニーホウ（1943～）のマスタークラスに参加し、ウィーンの若手作曲家たちのグループを立ち上げた。2000年にハンス・アイスラー作曲賞で第1位を獲得すると一躍注目を集め、以来、2002年ザルツブルク・イースター音楽祭作曲賞、2009年北ドイツのシュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭のパウル・ヒンデ

ミット賞など、作曲家の登竜門となる数々の賞を受賞した。

また、2005年にはラトル指揮のベルリン・フィルで、レオナルド・ダ・ヴィンチの作品と芸術論から着想を得た大編成の〈アペイロン〉が初演され、2006年のザルツブルク音楽祭の開幕コンサートではモーツァルト生誕250年を記念して作曲されたチェロ協奏曲〈セグエ〉が、ハインリヒ・シフの独奏とバレンボイム指揮のウィーン・フィルで初演されるなど、活躍の場を大きく広げていった。アルディッティ弦楽四重奏団（+ウィーン放送交響楽団）、ペーテル・エトヴェシュ指揮のアンサンブル・モデルン、ジョージ・ベンジヤミン指揮のアンサンブル・アンテルコンタンポランなど、現代音楽のスペシャリストたちのためにも作品を書いている。

最近では、2012年にギリシャ神話に登場する3人の復讐^{ふくしゅう}の女神の怒りをタイトルにした〈マニアイ〉がマリス・ヤンソンス指揮のバイエルン放送交響楽団で、2014年にはスイスのルツェルン音楽祭のコンポーザー・イン・レジデンスに選ばれ、新作のオペラが初演された。シュタウトの音楽は、奇抜

さで目を引くのではなく、細部まで緻密に作り込まれている。そのため真面目なよく書けた現代作品との印象を受けるかもしれないが、オーケストラ曲では弦楽器と管楽器が複雑に絡み合い、多種多様な打楽器を加えて緊密な響きを作り出す。そのなかでテクスチュアの濃淡や繊細な息づかいなど、細やかなニュアンスまで音で詳らかに描いていく。

さて、独奏ヴァイオリン、弦楽器と打楽器のための〈オスカー〉は、ルツェルン音楽祭、ルツェルン交響楽団、ウィーン・コンツェルトハウス、ウィーン放送交響楽団の共同委嘱作品として作曲され、2014年8月27日に五嶋みどりのヴァイオリン独奏、ジェームス・ガフィガン指揮のルツェルン交響楽団によって音楽祭で初演され、独奏者に献呈された。シュタウトは、自作の素材を他の作品で用いる際、いつも元の作品との関連をタイトルで示すが、この作品では、2005年のミュンヘン国際音楽コンクール課題曲として独奏ヴァイオリンのために書いた〈明るいい色に向かって〉の素材を用いているため、〈明るいい色に向かってⅡ〉という副題も付いている。

全体は、連続して演奏される五つの部分から構成されている。弦楽器は、

適宜パートが細分化され、三つの打楽器群は、それぞれ異なる種類の楽器が周到に組み合わせられている。

ゆるやかな第1部では、打楽器の響きを合図にチェロとコントラバスのピッツィカートで支えられた弱音の響きから、独奏ヴァイオリンの、ほの暗く波打つように細かく動く旋律が現れる。これが次第に高まり、ヴァイオリンやチェロにもその断片が広がる。それに対する打楽器群は、それぞれ異なる響きを持ち、重なり合う。快活な第2部は、弾むような旋律の独奏ヴァイオリンが、ヴァイオリンおよび打楽器群と室内乐的な対話を続ける。オーケストラの楽器が増えるとテンポを頻繁に変化させて高音域に向かい、後に再び独奏ヴァイオリンのみとなる。規模の大きな第3部は、目まぐるしく動く低弦楽器で始まり、徐々に楽器を重ねて音響は厚みを増す。独奏ヴァイオリンの技巧が先鋭的になり、上行音型^{しつよう}を執拗に反復し、その途中で超絶技巧のカデンツァが現れる。第4部は、二つ目のカデンツァで、重音と第1部で現れた6連符の音型が連続する。静かで繊細な響きの第5部は、独奏ヴァイオリンのトリルが続き、最弱音へと向かっていく。

楽器編成／打楽器（ヴィブラフォン、シンバル、木魚、大太鼓、トライアングル、スレイベル、ベルツリー、グロッケンシュピール、チャイニーズシンバル、タン布林、チャイニーズゴング、マリンバ、ボンゴ、コンガ）、弦五部、独奏ヴァイオリン

デュティユー

交響曲 第2番〈ル・ドゥーブル〉

作曲：1957～1959年／初演：1959年12月11日、ボストン／演奏時間：約30分

生誕100年を迎えたフランスの作曲家アンリ・デュティユー（1916～2013）の作品を、常任指揮者カンブルランは、今年の定期公演で継続的に取り上げている。2月の〈音色、空間、運動〉（1976～78）、6月のチェロ協奏曲〈遙かなる遠い世界〉（1970）は、いずれもチェリストで指揮者のムスティスラフ・ロストロポーヴィチと結びつきの深い作品であった。そして10月定期では、この2作より以前に作曲された交響曲第2番が演奏される。

デュティユーは、フランス西部のアンジェに生まれた。パリ音楽院でアンリ・ビュッセルらに師事、1938年に「ローマ賞」を受賞した。1945年から63年までフランス国営放送局の音楽制作部門に勤め、ラジオや映画等とも関わりながら同時代の様々な音楽に触れた。交響曲第1番（1951）で国際的な評価を受け、1967年には国家音楽賞を受賞した。パリのエコール・ノルマル音楽院やパリ国立高等音楽院で作曲科教授を長年務め、フランス音楽界の重鎮として存在感を示した。多作家ではないけれども、近代フランス音楽の伝統を受け継ぎ、保守でも前衛でもない、独特の透明感のある、洗練された響きの音楽を作り出した。

デュティユーは、2曲の交響曲を書いたが、交響曲第2番は、クーセヴィツキー財団の委嘱で、ボストン交響楽団創立75周年のために作曲された。創立を記念して、ブリテン、マルティヌー、ヴィラ＝ロボスら世界中の多くの作曲家に作品が依頼され、フランスからはミヨー、イベールとともに若い世代からデュティユーが選ばれた。

当時、ボストン交響楽団の音楽監督を務めていたのは、戦後の楽団の黄金期をもたらしたフランスの指揮者シャルル・ミュンシュ（1891～1968）で、デュティユーの交響曲第1番のアメリカ初演（1954）をいち早く手がけ、その後もアメリカ各地で演奏するなど、彼の作品を高く評価していた。委嘱を受けたデュティユーは、作曲を慎重に進め、ミュンシュがフランスに戻ってくるたびに書き上げた楽譜を見せて助言をもらい、完成させると、彼の前で全曲をピアノで演奏したと伝えられる。

1959年にミュンシュの指揮で無事初演を終えると、引き続きニューヨーク、ワシントンなど、わずか9か月の間にミュンシュの指揮で9回演奏された。その成功は、デュティユーの現代音楽の作曲家としての評価を定着させ

ることになった。

この交響曲は、二つの管弦楽群——大管弦楽（フルートはピッコロの持ち替えを入れると3本だが、標準的な2管編成）と12人の独奏者による小管弦楽（チェンバロとチェレスタが入る）——で構成される。小管弦楽は、楽譜で指定されているように、指揮者の前に半円を描くように配置され、それを取り囲む大管弦楽と対立や対話を重ねていく。とはいえ、これはバロック時代の合奏協奏曲のように見えるが、その発想アプローチとは異なり、二つの管弦楽群は、重なり合い、絡み合い、ときには一体化しながら、音色の対比や異なるリズム進行（ポリリズム）、多調など、多様な響きが追求される。それはまさにタイトルの〈ル・ドゥーブル（分身）〉の由来でもあり、「二つの特徴がひとつになり、互いに反映させる」と作曲家が語るように、変奏や変容の手法を巧みに用いて、繊細で微妙なテクスチュアの変化によって音楽は形作られていく。全体は、急緩急の3楽章から構成される。

第1楽章 アニマート、マ・ミステリオソ 小管弦楽のティンパニに導かれ、クラリネットが急速に駆け上がる楽想が現れる。この耳に残る楽想は、3回反復された後、大管弦楽へ広がり、

ティンパニが刻んだリズムは発展し、大管弦楽のヴァイオリンにも新しい楽想が現れる。チェレスタの歯切れの良い楽想は、すぐに他の楽器へ受け渡され、やがて弦楽器でたっぷり歌われる。このように楽想は、次々と変奏・変容し、劇的な高まりと繊細な静けさが繰り返される。冒頭のクラリネットの楽想に導かれて神秘的な雰囲気は再現されてからは、二つの管弦楽群が静かに呼び交わしながら終わる。

第2楽章 アンダンティーノ・ソステヌート 暗く静かな緩徐楽章。低弦楽器の対話から始まり、ド#をめぐる様々な響きが作られ、美しい歌が浮かび上がる。ゆるやかなうねりを作りながらリズムや動機が二つの管弦楽群に浸透し、この楽章にも急速に駆け上がる楽想が現れる。やがて静かに落ち着き、そのまま続けて終楽章へ。

第3楽章 アレグロ・フォコーソ～カルマート 大管弦楽のみの力強い音楽で始まる。急速に駆け上がる楽想の反復をはじめ、前楽章までのリズムや楽想が現れる。二つの管弦楽群が掛け合い、ダイナミックに展開し、後半では弦楽器に^{けいれん}痙攣するようなトリルが連続する。最後はゆったりとした静かな部分となり、弦楽器の響きの中で終わる。

楽器編成／大管弦楽：フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、（バスクラリネット持替）、ファゴット2（コントラファゴット持替）、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、打楽器（シロフォン、ヴィブラフォン、トライアングル、大太鼓、シンバル、銅鑼、小太鼓）、ハープ、ジュ・ドゥ・タンブル、弦五部
小管弦楽：オーボエ、クラリネット、ファゴット、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、チェレスタ、チェンバロ、ヴァイオリン2、ヴィオラ、チェロ